

劉曉峰 教授/刘晓峰 教授

清華大學歷史系 教授/清华大学历史系 教授

日 時 : 2022 年 3 月 14 日

場 所 : 北京市内

使用言語 : 日本語

聞き手 : 野口裕子

(国際交流基金北京日本文化センター)

時 間 : 2022 年 3 月 14 日

地 点 : 北京市内

使用语言 : 日语

采访者 : 野口裕子

(北京日本文化中心(日本国际交流基金会))

【目次】

1. 日本との出会いから現在まで

(1)初めて出会った日本人

(2)日本語の学習

(3)日本留学と日本史専攻への転換、清華大学での
日本史研究の立ち上げで得た日本各界の支援

2. 研究について

(1)研究テーマの変遷

(2)「2本のペン」

(3)研究における日本の影響

(4)日本人研究者との思い出

(5)代表的な研究や最近の研究について

(6)中国の日本研究者の視点

(7)中国の日本研究の世界への貢献

(8)これからの研究について

【目录】

1. 结缘日本至今

(1)初次遇见的日本人

(2)学习日语

(3)留学日本，改学日本史，在清华大学开设日本史
研究中获得日本各界的支持

2. 关于研究

(1)研究题目的变迁

(2)“两支笔”

(3)研究中的日本之影响

(4)回忆日本研究者

(5)具有代表性的研究和最近的研究

(6)中国日本研究者的视点

(7)中国的日本研究对于世界的贡献

(8)关于今后的研究

【本文】

1. 日本との出会いから現在まで/结缘日本至今

(1)初めて出会った日本人/初次遇见的日本人

故郷は東北地方の吉林省です。最初に出会った日本人は残留孤児でした。彼女は近所に住んでいて、同じ井戸を使っていますのでしょっちゅう会います。それで大人たちはひそかに私に、「彼女は日本人だ」と。

最初に日本の人々を目にしたのは、70年代の末でした。日本の、たぶん昔の開拓団の親戚たちが、亡くなった人たちの供養に来たんですね。印象深いのは、あの人たちは持ってきたものを最後に供養として、全部、橋から川の中に投げ込むんですね。それで、私たち子供たちはこっそり流れの下でそれを全部拾うんです。私が初めて液体のライターを見たのはその時でした。マジックも色つきのマジックは初めて見ました。当時は供養という発想が頭になかったので、このような洋服やいろんなものを捨てる今の日本はどれほど豊かな社会か、と。服の様子を見ればわかるんですね。「今の中国とだいぶ違う」と実感

したんです。

(2)日本語の学習/学习日语

1979年に大学（東北師範大学）に入って、第一外国語を教えられますんですが、当時は四人組が失脚したばかりで教育体制はまだ整っていませんから、当時は英語の先生が足りない。ですから、私たちのクラスは第一外国語は日本語になりました。教えてくださった先生は、昔の満州国時代の高校の卒業生。後に、北京外国語大学から北京ラジオで日本語講座を放送するようになって、その発音と私たちが勉強した発音のアクセントが違うことに気づきました。

さらにもう少し進むと、当時、東北師範大学には留日予備学校がありまして、そこで流れる日本語のテープレコーダーで録音された先生たちの発音とかが耳に入りまして、「ああ、今の日本語はこういう日本語だ」と。だから、その時代は、中国は日本とははるばる距離があるような感じでした。

ここで一言感謝したいのは、NHK（日本放送協会）ラジオ放送の日本語講座です。NHKに日本語を教える番組がありまして、日本語のテキストの下の方には住所がちゃんと書いてある。ここに、日本語を勉強したければ、手紙を出して下さったらテキストとテープを無料で送ると。私の寮の同じ寝室の人が、そのラジオ放送のテキストを欲しいと手紙を1通送ると、テキストとテープ共に送ってきた。手紙一通の切手代はたった8分。それだけで、こんなに信用されて、テキストとテープを送ってくれるということに、びっくりしました。どれほど友好的に人を考え、そのうえでこんな行動があるのか。偉いなと思いました。だから、NHKのラジオ放送のその活動はすごく印象深いです。当時、たぶんたくさんの中国の若者は、その恩恵で、日本語を勉強したと思う。だから80年代の頭の頃にNHKがこんな偉いことをしたということ、いっぱい中国の若者が感謝しているということは、ぜひ、NHKに伝えてほしいです。本当に偉いことをその時の日本人はしたんですよ。

(3)日本留学と日本史専攻への転換、清華大学での日本史の立ち上げで得た日本各界の支援/留学日本，改学日本史，在清华大学开设日本史研究中获得日本各界的支持

大学時代から日本語を勉強しはじめましたが、私の専攻は中国古典文学で、日本との縁はそれほど深くなかったです。修士課程が終わって清華大学で5年間勤めました。1989年、私は留学という考えを固めまして、いろいろ連絡しました。図書館で大学案内を調べて何人かの先生に手紙出したんです。富山大学の当時の日本史の先生の櫛木謙周先生は私の手紙を読んでお返事を下さり、奨学金を申請しますからしばらく待ってくださいと。それで文部省の奨学金で留学できるようになり、1991年、日本へ留学しに行きました。

日本で留学するのであれば、そのまま中国古典文学を勉強することはもったいない。この国に留学する以上、この国のことを勉強しようと。それで専攻を日本史に変更しました。当時は単に日本を知るためにやっぱり歴史は一番近道と考えて。ところがね、日本史は難しい。特に昔の日本の言葉、例えば古文書、例えば崩し字。頭痛いほど大変だった。これは大変。当時はこんなに難しかったということは知らなかった。

修士課程は富山大学で、それで博士課程は京都大学。博士課程後期編入という形で試験があるんですね。当時、富山大学から直接京都大学の博士まで行ける若者は少ないので、富山大学ではすごく評価されて、人生の重要な一つの段階を上りあがったという感じがしました。学問の大きな舞台に行けた、そ

こでもっと自分は大きく成長できるという、当時はまだ若いから。そうねえ、生意気でね。中国の日本史の研究の第一行列にこれから入ろうという志でね、当時はやっぱり若い（笑）。2000年の9月に学位をもらって、もう一回清華大学に戻って、日本史の先生になりました。日本との縁はそこから、切りたくても切られないものになりました。

京大での先生は鎌田元一先生です。京都大学の学問の精神はすごく私に影響が深いです。最初の富山大学の櫛木先生は京都大学の出身。櫛木先生が京都に戻られた後に来られた本郷真紹先生も京都大学の出身。それで私は京都大学に入って鎌田先生に従って。私は最初、京大に入る頃には、先生からいろいろ指導を受けると思っていたんです。ですが、1学期が終わって、ほとんど指導はない。で、次の学期が始まると、またほとんど何もないから、先生に質問に行ったんです。結局、京都大学はどういう大学かというと、「自啓自発」。自分で学問の世界に入り、そこで自分で問題を見つける、その問題にしたがっている研究を深める。そこから自分の得られる知識に自分の学術的な成果があると。ですから、すごく豊かな京都大学の図書館で5年間たっぷり本を読んだことは、のちにとっても私の学問の力になりました。

鎌田元一先生はすごい先生でした。スケールが大きい。惜しいのは60の年で病気で亡くなられたことです。鎌田先生が買われた本と雑誌は、その後全部私のところに寄贈されました。6000冊、包装と送料で、日本から中国に運ぶだけでも大変ですよ。私が清華大学へ戻った頃、歴史系の資料室にあった日本語で書いた本はたった6冊でした。それで日本史を教えるのは無理ですから、一生懸命本を集めました。たまたま、富山にYKKというファスナーを作る会社がありまして、そのYKK(中国)投資有限株式会社の総経理の俣野社長と知り合いましたが、それを見てすごく感動された感じで、会社の支援で全部負担してくれました。だから、相当お金がかかりました。うまくその本を全部清華大学に運んでくると、京都大学の吉川真司先生が8人の大学院生を連れて清華大学に来て、図書館で必要な目録作成のために、全部一冊一冊、コンピューターで登録してくれまして。2回ほど来ていただいたんです。

そこからYKKは2008年から2014年、2015年あたりまで、毎年、清華大学に本も寄贈してくださいました。その後は、日本語の本は税関でなかなか複雑になりましたが、その志を何らかの形で表したいということで、これは俣野さんではなくて後の社長の大門さんですが、清華大学での日本語の講演会とか、日本に関する本の出版とか、今もYKKから支持をいただいているんです。だから人生は縁というものです。まあ一つのいい縁から、たくさんのいいことが生まれてくると。

清華大学には1949年以降、日本史を教える先生はいませんでした。だからスタートは大変。2000年に戻ってきて、そのうちに国際交流基金と付き合うようになりました。当時の担当は塩澤（雅代）先生と黄（海存）先生。何回も国際交流基金からお世話になりました。それは私にとっては大きな力になったんです。

一番の思い出は、みんなの協力で、日本の知識人の代表である加藤周一先生に講演していただいたことです。たくさんの人が集まったんですよ。それで私はすごくよく思い出すのは、国際交流基金の方々はこの講演会を成功するためにいろいろ奔走したでしょ。ところがその講演があんまりにも人気で、先生の講演の講壇の周りも学生がいっぱい。で、その塩澤さんは外で、カーテンの後ろに立ってる。あれはすごく感動しました。これほど尽力した方が、ひそかに、講堂の陰の後ろに立ってるあの姿、あれは昭和の時代の日本人の姿やなど、今思えば、すごく忘れられません。

国際交流基金の支援で何回も清華大学と北京大学と京都大学の共同のシンポジウムを開いたこともあるし、当時、二十何人もいた日本留学経験のある私たち博士たちの集まりで、「清華東アジア文化講座」

を作りまして、そこから今までずーっと活動しています。

今、清華大学は世界大学のランキングでだいぶ上に上がってきました。それはいろいろ人々の心と力を集めてここまで上がってきたと思います。少なくとも日本史の分野の成長は、いろいろ日本の方々の力があつたと私は思いまして、すごく心から感謝しております。

2. 研究について/关于研究

(1)研究テーマの変遷/研究题目的变迁

私は12歳ごろ詩を書き始めて、今もたまに詩を書きます。日本に行ったら日本の詩もたくさん読みました。ですから文学は私の研究以外の畑です。そして日本に着いたら日本史に専攻を転換しまして、歴史は私の仕事になるわけです。博士論文のテーマは年中行事。年中行事の中日古代の関係を研究しますから、そのうちに年中行事の背後にある「時間」であることを認識出来ました。この問題は哲学の問題と深くつながってきます。結局、私の研究は文学、歴史、哲学にまたがっています。よく周りの日本研究の仲間に、「あなたたちは専門家、私は『雑家』」と言っています(笑)。いろいろなところに興味があつて、いろいろなところにもものを書く。幸い最近、中国はいろいろ学科を超えて総合的にものを研究するという新しい動きがあります。私はそれに一番合う。今までの学問のように簡単に西洋的な学科に沿って動くのではなくて、古代の東アジアの文化、東アジアの世界、あの実像を見ながら、ものを考える、ものを書くというところは自分の強みがあると思います。というのは、古代の、例えば『日本書紀』は文学でもあるし、歴史学でもある。日本の宗教、日本の思想研究の一番重要な資料でもある。中国でも『四経』とか『尚書』とかは、同じですよ。だから本当の古代の文化、古代の世界を知るには、学科と関係なくて、本当の人文の精神を追求するところは本旨本命ではないかと私は考えております。

(2)「2本のペン」/“兩支筆”

私は常に学生さんにも言うんですけども、「2本のペン」が必要です。一つは学問的なペン、つまり専門家たちと交流する分野のペン。こっちの方は重要です。自分の立身出世の畑です。ところが知識を社会に伝えることは知識人のもう一つの役割。ですからもう一つ、庶民に向けて、大衆に向けてものを書く力が必要です。そういう場合は文章の書き方や語り方は違うんですよ。私は自分の教え子にも「もう一つの文章を書く方法があるから勉強しなさい」と。人間は如何に行動するかというと、「考え方」によって行動する。人間の考え方は、ものを読んで、そこからいろいろ知恵を頭に入れることで形成されます。だから、たくさんの人に精神的な栄養を提供することは、知識人の一つ大きな宿命だと思います。

(3)研究における日本の影響/研究中的日本之影响

私にとって日本は何なんだろうと、自分に聞くとときがあります。

80年代頭の時代では、中国のこれからは全面的に西洋に倣う、というようなスローガンで考えたんですよ。ところが日本に着いてみると、日本はこれほど科学的に発達してる現代社会であるにもかかわらず、自分の昔の伝統をそのまま保存したものがたくさんあり、それが社会の力、エネルギーになっている。それを見て、若いころの考え方はだいぶ間違っていたと思いました。これからは、東アジアに大きな影響を与えるこの中国の古代の文化の伝統を、やっぱり大事にしなければならない、力を入れて研究しなければならないと思いました。これは私にとってすごく大きな知的方向の転換とつながっています。

これは一点目です。

二番目に、日本と付き合うことによって、もう一つの民族、もう一つの人の群れと付き合うことになる。人間はそれぞれ自分の習慣とか風俗とか、民族性とか、いろいろあって、一つの民族、一つの人の群れの考え方が、かならず全部正しいとは言えない。いろいろ角度でものを見るといような知恵が身に着きました。そして私たちがとても幸せだったのは、80年代90年代、その頃の日本の人文社会科学はすごくいい時期ですよ。その時代にそこで勉強したものは、やはり大きいです。日本と付き合うことで、私たちはこれほど世界から自分の国を思うことができる。そして中国から世界を見る、この両方の目線は日本によってだいぶ変わりました。ですから、日本に留学できたことは自分の人生の大きな出来事だと思います。自分の人生経験の宝物、私はそういう風に思います。

(4)日本人研究者との思い出/回忆日本研究者

日本の研究者で鎌田先生のほかに印象深いのは、吉川真司先生です。私よりたった2歳年上ですが、すごく頭が良くて、吉川先生の古代日本の宮廷の儀式の研究は私に影響が大きいです。そして、ものをはっきり言う人ですよ。意見があればはっきり言う。それで自分の意見が変わるとまたはっきり言うんですね。例えば私が書いた論文に、「あなたのこんな考え方は通るかどうか疑問だ」とそのまま言うんですよ。それで、たぶん十何年あと、北京でまた会った時に、その時は吉川先生は中国大陆と日本の関係に目が向くようになって、「劉さんが書いた論文はすごく通る」って、また素直に私に言う。で、その言葉は、耳に入るところで、やっぱり吉川先生は大人（たいじん）ですね、と思いました。

その辺りは例えば、さっき話した加藤周一先生もそうで、講演会の前の夜は清華大学の「丙所」で、深夜まで二人で話をしたんですよ。やっぱり人の話を聞く。その話に合うように、いろいろ自分の豊かな知識でものを考える、それではっきりものを言うところ、やっぱりそれは学者の真面目（しんめんもく）です。

後は例えば、小峯和明先生。東京大学の子安宣邦先生、日文研の小松和彦先生、みんな本当にレベルの高い先生たちは、はっきり自分の考え方を述べるというところは、すごく偉いと思います。学問の見方がいろいろ違うところがあって、議論があって、それでも後で酒を飲む時は、学者の学問に対する情熱は、お酒と同じように人に酔わせるものです。この人生でたくさん日本の学者と付き合っ、幸せと自分は考えております。

(5)代表的な研究や最近の研究について/具有代表性的研究和最近的研究

私の研究は雑学ですが、中にいろいろジャンルがあって、一つは自分の仕事である日本史ですね。日本史の方で今、中心にしているのは古代日本史の最初の部分、日本神話のあたりで、学生とゼミを作って5年間ずっと『日本書紀』を読み続けてきました。今年、みんなで論文書いて、『日本書紀』の論文集を出す予定です。古代日本の神話、宗教、習俗、これは自分の研究の一つの中心です。

もう一つのテーマは、年中行事から研究に入ってますから、年中行事の背後にある「時間」です。東アジア世界の昔の「時間」に関するいろいろな文化を根から掘り出して、中国と日本だけじゃなくて、朝鮮半島も、昔の琉球王国も、ベトナムも全部視野に入れて、全部整理するというつもりでやっています。去年出版した論文集『時間と古代東アジア世界』¹⁾は結構好評を博しまして、中国政府が支援する中国の学者の本の外国語への翻訳事業のリストに入れられまして、今翻訳されているところです。最初はおそら

く韓国語です。

暦は「時間」の「形」ですが、例えば東アジアの暦と西洋の暦はだいぶ違います。その違いから何が見えるのか。それから、例えば、今、西暦 2022 年ですが、この西暦には 0 年があって、スタートはキリストとつながっているでしょう？東アジアの時間はどこからスタートするのか、その文化の流れはどこから来るのか。人間の頭の中にどんな考え方があって東アジアの時間が組み立てられたのでしょうか。組み立てられたものの表現はいろいろありますけれども、その裏にみんな求めるものは何なんだろうかと。

年中行事に話を戻しますと、柳田國男という日本の学者はすごく年中行事に興味があって、彼の研究はすごく面白いです。私は日本の修士時代に柳田國男の本を読んで、それから、自分のいろいろな中国の古典知識に照らしてみると、実にいろいろつながりがあるなと思いました。それでいろいろ先行研究を見れば、まだ誰も言ってない部分が結構ありまして、だから修士時代から今までずーっとこの畑でいっぱいものを掘ったんです。この年中行事の話はもともと学問的な、自分でひそかにしているものでしたけれども、たまたま、2005 年に韓国が江陵端午祭りをユネスコの人類無形文化財に申請した。これは中国に大きな反響を引き起こしまして、それで中国では、「年中行事は重要だ」と、みんな目を年中行事に向けるようになって、私の研究はワーストと知られるようになりました。私はそれ以前に十年ほどこの畑でいっぱいものを研究しているから、当時は大分活躍でき、新聞とかテレビとか、あとは本の出版とか。何か「風に乗った」感じで（笑）。そこから 2007 年に『東アジアの時間』ⁱⁱという論文集を出版し、もう一本のペンでは大衆向けに『日本人の顔』ⁱⁱⁱ、この二つの本を出版しました。

そして、「これから日本神話を研究しよう」と思ったところで、ある日、夜に夜空を見て、星を見ました。星を見ると、昔の人間の星に関する考え方をたくさん思い出して、「このあたりは全部まだ、日本でも中国でも正しい形で整理されてない。東アジアのこの分野の文化はどうして真正面から研究する人がいないのか。やらなきゃいけない。」と思って、またこれ続けてするようになりました。だから人間は最初、学問を自分の道具として使うけど、結局自分がその学問の道具になったという経験は、この私の人生です（笑）。

(6)中国の日本研究者の視点/中国日本研究者の視点

去年『日本史研究』という雑誌に「中国における外国史としての日本史研究」という論文を書きました^{iv}。その中で言ったのは、日本という国は中国に対して二つの立場がある。一つは学生、一つは先生。明治維新以前は、日本は学生という立場で勉強した部分が多い。明治維新以後は、かえって中国が日本に学ぶという時代が始まりました。この時代がどこまで行くかというのは、私のすごく関心のあるところで、私は中国の日本研究の中で一つ新しい分野にメスを入れたんです。それは平成時代。2015 年に私は『日本学刊』で「『平成日本学』論」という論文を発表しました^v。私が言いたいのは、この「平成」という年号は単なる年号、一人の天皇の統治する時代の用語ではなく、実に一つの時代だということです。

どんな時代かというと、日本が高度成長時代からだんだん落ち着くまでの転換期です。これは 30 年余りありまして、この転換期は、中国にとってはどんな意味があるかというところを私は問うています。中国も 1978 年から高度成長期に入りましたが、経済学のルールに従えば必ず高度成長は限度があり、落ち着く時代に向かっていきます。日本は 90 年にバブルが崩壊しましたが、それから今まで 30 年余り、大きな社会動乱がない。いろいろ禍、天災もあるにもかかわらず、きちんと国として今そこに存在しています。そのいろいろノウハウは、これからの中国にすごく重要です。

そこから、外国学者としての私たちが日本の学者と違うところ、あるいは私たちの存在する意味に関わりますけれども、私が一つ思うには、日本人は学者から庶民まで、平成をすごくマイナスの目で見えていますね。「失った10年」、「失った20年」、「失った30年」。でも何を失いました？もっと理性的にこの30年を見れば、実にもう一つの視点があるんですよ。実にこの30年間は、並みの30年ではない。冷戦の終結は89年。だからこの平成のスタートはすごいですよ、世界史の転換期にもあるんですよ。そこから何が変わったかという、日本は高度成長が進みましたが、そのうちに韓国、シンガポール、香港、台湾も進んできたでしょう？その後は東南アジアのいろいろ小さい国もどんどん成長してきた。その後は、中国がぐんと成長してきた。これは大きな勢いですよ。世界史でもものをこれから書かなければならない勢いです。それなのに、日本はしっかりこの30年間で優位を保つ。例えば、国民の平均的なGDPは今も一人の中国人よりも何倍も上、これは簡単なことじゃないですよ。だから「失う」という目でものを見るんじゃないで、もっとまじめに、自分たちの努力、だんだん厳しくなる環境の中で一生懸命頑張ってきた、その成果を高く評価しなければならない。文明というものは水みたいなもので、必ず水は高いところから下に流れて、いつか平均的なレベルになることは道理ですよ。だから技術というものも、だんだん各国はほぼ同じレベルになっていくと思う。その中で、自分の社会の良さや強みを保って、きちんと日本人はこの30年間頑張ってきた。だから外国人の私としては一私は中国で最初に「平成日本学」という考えを提示した人間ですけども—この30年間は真正面に評価しなければならないということをつくさんの日本人に知ってもらいたい。「失った10年」とか「失った20年」とかいう言い方は本当、あんまりです、本当おかしいです。

例えば高齢化社会、少子化時代に入ることも、中国も同じですよ。日本はこのためにいろいろシステムを作ったり政策をとったりしたんです。そこから私たちが勉強すれば、中国のこれからの社会発展に非常に役に立つでしょう。だからこの間には中国の立場でも日本の立場でも、改めて見るべきものがあると思います。ですから、平成日本の研究はこれからと私は考えております。そういう意味ではやっぱり外国人の目は外国の学者の目と日本の学者たちと多少違うところがあるのではないかなと私は思います。

(7) 中国の日本研究の世界への貢献/中国的日本研究对世界的贡献

2004年、2005年の頃、「東アジア文化講座」を作る時に、私は「東アジアは一つの夢」というテーマで短い文章を書きました^{vi}。私は歴史の畑で生きる人間で、ものを考えるときは歴史的な目でものを考えるようになるんです。歴史でものを見れば、世界の変化の一番大きなものは、東アジアの進歩です。最初は日本が一番駆け足で進んだんですが、今のところ、中国も東南アジアもだいぶ進歩したんですよ。ここは全世界で一番進歩が大きい地域です。どうしてこの地域だけこれほど速く進歩しているのかは、いろいろ議論がありますが、問題は、このような進歩の後、東アジアというところには何を求めるべきかということだと思います。

私はEUを見る時につくづく思います。フランスとドイツは長い間お互いに戦ったんです。それでも、EUを総合的な一つの組織として、ヨーロッパは世界のパワーがある集団になった。中国と日本と韓国、それに北朝鮮も東南アジアも含めて、この地域がこれから、例えば何十年、あるいは100年、平和を保つようになれば、それはどんなに幸せなことでしょう。共に発展、繁栄できれば、どんなに幸せなことでしょう。この平和な東アジアのために、何かしたい。今語るのはまさしく一つの「夢」ですが、そんな「夢」

があってこそ人間ですよ。この夢のために何ができるのか、私も自分自身に聞く。そこで今私が研究するこの「時間」、これはすごく東アジア文化の文化基礎です。まず中国で一つ時間のシステムができて、それが東アジアに伝わって行って、それぞれ地元の文化があるからそれを色々改造しまして、その中にいろいろ習俗とか年中行事とか、そこに含まれるんですね。これは東アジア全部の人間の共同的文化の遺産です。私は小さな一人の学者ですから、いくら大きな話を言っても、しっかりした仕事が必要です。ですから私はこの「時間」の分野だけでも何かできればと思います。私の語る夢のために、一本の柱をそこに建てる。それは私の学者としての一つの夢とか、これから歩いていく方向ですね。ですから夢を見ることは幸せですよ。世の中に夢がなければ、その世界の実像は悲しいものです。

(8) これからの研究について/关于今后的研究

一つは、以前行った、京都大学、北京大学、清華大学の日本史のシンポジウムのように、東アジアという文化の全体性を主張するようなシンポジウムを、あと 6 年で退職ですがそれ以前に二、三回できたらと思います。各国の学者の間の交流、これは一つとても大事なところですが、幸い今、ネットがあるから、前よりだいぶ便利になりました。

個人の研究では、やはりいっぱいあります。人生はその辺りは辛い。たくさん材料を用意したんですが、時間がなくて書けない部分が結構あります。例を一つ挙げてみれば、正倉院の宝物にとっても興味があって、自分の考え方もあるし、資料もあります。ただ、今は「時間」一本に絞って進んでいますから、ずーっとそれ（正倉院）を見ながら、「いつか時間があればこれを書こう」と。しかし今、書いてるものは大きな問題ですから、今年できるか、来年できるか、まだ分かりません。ですから学問は私を道具として使っています（笑）。自分はここでこれきりにしようと考えても、形として社会にまだ出していませんから。。。人生は短いもんやなあ、て（笑）。

しかし学問の人生はやっぱり幸せな人生です。ものを見る目は、現実ばかり見る人間と多少違います。学者はたくさんの知識を勉強しますから、もっと豊かにものを考えられます。ですから、この世界の進むべき方向とか、大きな言葉なんですけども、そういうことを考えるのがほとんどの学者だと思います。それが目の前にあれば、エネルギーは心から湧き出てきます。私は毎朝 4 時頃、5 時頃早起きして、こういう態勢で一日に書くべきものを書きます。やっぱり幸せやな、こんな人生。

公開：2023 年 3 月 9 日

ⁱ 刘晓峰著《时间与东亚古代世界》社会科学文献出版社，2021 年

ⁱⁱ 刘晓峰著《东亚的时间》中华书局，2007 年

ⁱⁱⁱ 刘晓峰著《日本的面孔》中央编译出版社，2007 年

^{iv} 刘晓峰 刘晨：《中国における外国史としての日本史研究》，日本，《日本史研究》2021 年第 5 期

^v 《“平成日本学”论》中国，《日本学刊》2015 年第 2 期